

古代に於ける君主崇拜の意義

— 帝國主義的イデオロギーとして —

中原 與茂 九郎

君主崇拜は人類の文化が屢々逢着すべき最も興味ある宗教的政治的民族心理現象の一人で古來多少深淺の別こそあれ、世界の東西諸國に散見するところである。と故坂口教授は「君主崇拜」¹⁾の研究論文の初頭に述べられ、古代東方時代はさておき、クラシック古代に於ける君主崇拜は大體に於て千古の偉人アレクサンドロス大王に創るのであるが、それ以前既に萌芽する所があるとして、五世紀末ペロポネソス役の終結に、スバルタの名將リサンドロスがスバルタ及びその同盟を代表して、全權を揮ひ、ペルシャと提携してアテネ海上帝國を打破し、小亞に於て植民地都市を救ひ、東方大君主の如く同地方を制壓した時、サモス島民は宛然一個の神に對するが如く、リサンドロスの爲に、拜壇を設け、犠牲を奉り、讚頌を謳ひ、從來のヘーラ祭を改めてリサンドロス祭に化した。この風は他の都市にも一樣に行はれ、實にギリシャに於ける生存偉人の宗教的崇拜の嚆矢となつた。而してこれはギリシャ本國に創らずして、植民地側に始つてゐる。アレクサンドロス以前の君主崇拜には現存英雄に對する

のと、死せる有力者に對するとの二種の別はあるが、いづれも人間のヘーロス化を意味し完全なる神化アポテオシスでなく、且つその流行範圍も比較的狭小區域にとゞまつた。君主崇拜がヘーロス化より神化に向ひ、地方的から世界的流布に移るは民族心理上容易なる順序であるが、而も斯かる大展開の動機は主としてヘレニズム時代の最大開拓者アレクサンドロスの大個性にかゝつてをる。若しかゝる驚歎すべき人物の出現がなかつたならば、君主崇拜は後昆に對して莊嚴廣大なる意義に於ける制度とはならず、少くとも古代に於ける同現象は現今の傳來とは相異りたる經路を辿つたであらうと坂口教授は君主崇拜制度の確立をアレクサンドロスといふ一個性の偉大性に歸してをられる。²⁾ 又アレクサンドロス生存中の神化崇拜に關して、ギリシヤ市民よりの自發的行爲となす史家(Hogarth)、或は大王自らの命令と解する史家(Kaerst)、或はこれをもつて單に形式的問題として重きを置かぬ學者(Baoh)等あるに對して、教授自身は、蓋し大王は自ら神化の希望をギリシヤ本國人に對して抱いてをつたが公然何等の命令を發しなかつた。而もその偉大なる人格と千古稀覯の功業とはおのづから宗教的政治的市民に感動を與へ、彼等をして以心傳心的に神の敬禮を大王に表せしむるの已むなきに至り一言にしていへば上下相依りて現在治世中の君主の宗教的崇拜てふ制度を創立したとするが最も高き可信程度を有する解釋である。³⁾ とHogarth, Kaerstの兩説の折衷説をとつてをられる。しかしこれは大王の神化に就いての考察であつて、ヘレニズム時代に入り諸君主の第二世に當る時期即ち高祖時代を去つて太宗時代に於て

は現在治世君主自らの國家的崇拜が起り、これは最早君主が或神の僧侶の託宣に依頼しその認可を求めめるのではなく自らの命令をもつて自身及王妃を神化し、自ら現つ世の神として神そのものに高めらるゝのである。⁴⁾

坂口教授は又ローマ時代の君主崇拜の状況及その發展を詳述された後、君主崇拜の起源としては先づ古ギリシヤの傳說的偉人即ちヘーロス崇拜が歴史上偉人の死後に於ける崇拜となり、更に轉じて生存中の有力者崇拜に化したもので、その動機はアレクサンドロス又はケーザルの如き千古稀覯の偉人並に彼等が各自の後昆に及ぼした傳來的勢力に對する崇敬心が第一に注目すべき有力動機で、プラトーン、アリストテレス等が賢明なる君主に法律を超越したる神的性質を附與し、ストア派が君主の專制無限を唱導し又プラトーン以降個人不滅の信仰が發展したることが崇敬心に有力な哲學的後援を與へてをり、⁵⁾第二の動機としては、ヘレニスチック時代の特殊現象たる古ギリシヤ都市國家の破壊に伴つた宗教的政治的事情が擧げられ、この事情とは市國家の生命であつた古神祇に對する懷疑の念起りたる⁶⁾とこれ等の神祇に代るべき若くは、これ等の發現と見らるべき現實界の有力者を衷心より要望する人民の宗教心、市國家の事實上破綻並に市民の獨立心の銷磨に伴へる政治的妥協——強國と和親同盟を結びて自らを維持する——により市國家がヘレニズム君主又はローマ國家の代表者を神化すること、⁷⁾第三の動機は純粹の東方風の影響である。と述べてをられる。以上は坂口教授の君主崇拜の起源

及その意義に就いての見解であるが筆者は生存君主の神化及その崇拜をもつて、當該君主の命令強請によつて成立した制度で、その臣民の自發的要望によつたものではないと考へる。しかし征服被征服兩民族の別なく、一切古代人の間に共通に流るゝ特殊な宗教意識が君主神化の素質となつたことは認めねばならぬ。而して君主神化崇拜の動機は一大君主がその征服せる諸民族諸國民を抱有する一大國家に内部的統一を與へんための手段にあつて、實に宗教と帝國統一政治とを結びつけんとする重大な政治的動機をもつものである。故に制度化された君主崇拜は帝國主義國家の大君主の或はその周圍の支配階級者の有する世界統治意識ウエルトイムペリウムと古代人特有な幼稚にしてしかも熱烈な宗教意識とが結合して形成された一個の觀念形態即古代帝國主義イデオロギイと解釋されるであらう、以下その説明を行はんとするが例證を古代東方國家、主として兩河地方にとる。それはヘレンニズム世界にせよローマ帝國にせよその君主崇拜は古代東方のそれと同じ範疇に屬してゐると考へるからである。

- (1) 坂口昂、世界史論講 一七八頁
- (2) 同 書 一七八頁
- (3) 同 書 一八三頁
- (4) 同 書 一八七頁
- (5) 同 書 一九八—一九九頁
- (6) 同 書 一九九頁

(7) 同 書 同 頁

二

チグリス、ユーフラテス兩河地方に於ける諸都市國家竝立状態が破れて其等都市國家を征服統一して、こゝに統一的領土國家が創立されるのはサルゴン一世(約二八七〇B.C.)によるアッカド王國樹立によつてである。兩河地方に於ける都市國家の發生は西紀前約第六千年紀の中葉であつて、此頃より第四千年紀にかけて、兩河地方の北部アッカド地方には王朝樹立順に擧げれば、キシエKish、アクシヤク Akshak、アガデ Agade (|| アッカド Akkad)、南方シユメール地方にはウルク Uruk、ウル Ur、アダブ Adab、エリツツ Eridu、ラガシエ Lagash、ウムマ Umma、ニップール Nippur、あり、このうちニップールは兩河地方の宗教大本山の聖地(主神エンリル Enlil)にして、王朝は樹立されてゐない。此外中部ユーフラテスにマリ Mari、チグリス上流にグチ(ウム) Guti(um)、東方エラム地方にアワン Avan、カマデ Hamazi等の諸都市國家が散在した。アッカド地方の都市國家の住民はセム族であり、シユメール地方のそれはシユメール人 Ug, Kengi, Ug, Kalamna, nisi Shumeri、マリグチウムの市民はいづれも非セム人であり、非シユメール人でもあつた。エラム地方のアワン、カマデの王朝樹立者はシユメール人であつた。是等都市國家の政體は現存文獻にて知り得る限りでは祭政一致の神政々治であり、國權の主體は都市國家の主神であつた。例へばアガデの主神はイシユタル(

インニンニ) Ishtar, Innini¹ ラガシュのそれはニンギルス Ningirsu であつた。主権の行司者はパテシ
或はイサグ patesi, isag と稱する priest-king 或はルガル Ingal 即ち「偉大なる人」國王」であつた。
彼等はいづれも主権の主體たる主神によつて選任されたその代理者であつた。例へばラガシュの國王
となつたウルカギナはその圓錐碑文中に、「エンリルの戰士ニンギルスがウルカギナにラガシュの王位
を與へた時に…」ud² Nin-gir-su gufu En-li-la-ge Ur-ka-gi-na nam-ugal Lagas³ e-na-sim-na-a... Col.
VII²⁹- Col. VIII¹ なる。

是等自給自足の自然經濟状態にある都市國家間の争闘は各國家の國力を消耗さすのが普通であつ
た。しかし戰勝國家は戰敗國家の所有する公私の財寶を略奪した故に戰敗國の國力疲弊に較ぶれば問
題ではなかつた。戰闘及虐殺による人口の減少が國力衰退の最大原因であつた。例へば西紀前三千年
頃ラガシュとウムマとの抗争に於てウムマ側の戰死虐殺でうけた人口減は三萬六千人とこの戦ひの戰
勝者ラガシュの國王エアンナツム Eannatum の殘した「鷲の石碑」Stele of the Vultures に幾分誇張
的ではあるが記されてゐる。ウムマの總人口數は知り得ないが其人口の大部分が失はれたことは確か
である。従つてウムマが戰敗の重傷より恢復するには二百年餘の歲月を要してゐる。ラガシュ側の蒙
つた人口の損害も多大であつた。エアンナツムはその戰死者を合葬した丘塚の數二十個と記録してゐ
る。都市國家君主の殘した碑文によれば、いづれも都市國家間の戦ひに於て戰勝國軍は戰敗國內の神

殿宮殿私人の邸宅等を略奪放火し、都市の破壊を行つてゐるが、しかし戦勝國家が戦敗國家を自國の領土とはしてをらない。これは何を意味するであらうか。

自給自足の自然經濟に立脚した都市國家の經濟的活動が漸く發展し、増大した生産力に應ずる多量の資源が必要となつてくるとき従來戦勝國家は戦敗國家よりの戦利品の獲得によつて富強となり、戦敗國は國力恢復に多年の歲月を要すといふ自給自足の都市國家の對立關係が止揚せられ、生産原料の供給地生産品の販路として領土擴大てふ帝國主義政策が採用せられこゝに統一國家が出現するのである。しかるに兩河地方の冲積平原には多量の農産物家畜類は産するも、金屬、石材、寶玉、木材の如き重要資源に乏かつたため、是等の生産原料は他地方即ち東部地中海沿岸、小亞地方に求められねばならなかつた。サルゴン一世の西方遠征といふ帝國主義政策はその基因をこゝにもつてゐる。銀はタウルス山、木材はレバノン山、イブラ Hda、メルカ Melkhha、カク Khaku、銅はシナイ半島、キマシキ Kimash (Damascus)、金はメルカ、カク、大理石はチダヌ Tidann、石材主として閃綠岩はマガン Magan 地方より兩河地方に將來された。

サルゴン一世によつて統一王國が創立され、兩河地方最初の帝國主義國家が建設されるのであるが彼と同時代の競争者ウルク國王ルガルツマギシ Lugalzaggisi (C. 2890 B. C.)も自ら「ウルクの國王國土の王」Iugal Uunst-ga, Iugal kalam-maと稱してゐる如く、彼は始めウムの君主としてラガシ

の國王ウルカギナと戦ひ之を滅し、つゞいてウルク占領後は都をこゝに遷し更に聖地ニツプールを征服し漸次其領土を擴大し遂にペルシャ灣地方に及び、シュメール地方(南部バビロニア)をその支配下に置き「國土の王」即ちシュメールの王となり、帝國主義政策の地方的實現に成功した。

かくて南方攻略に成功したルガルツアツギシは北方アガデの國王サルゴン一世(約二八七〇—二八一四 B.C.)と衝突せねばならなかつた。牛津大學附屬博物館アシモレアン、ミュゼウム所藏の H. Weld-Blundell Collection の楔状泥章中、W-B, 1923, 444 の記號のついたブリズム、タブレットは洪水前後兩期に互る傳說的歴史的王朝表及び年代録を記銘してゐる。これは牛津大學教授ラングドゥン氏が發見發表せるものにして、洪水前期の傳說的王朝及び洪水後期キシム第一王朝よりイシン王朝までの年代録であつて、ニツプール發掘の所謂ニツプール年代録と共に初期シュメール、アツカード史の骨格をなすものである。アシモレアン、ミュゼアムの年代録によれば、³¹ Ag-ga-de Shar-nu-ki-in 32, i-lu-ba-ni nu-gis-šar 33, ka-šu-gab Ur-d, II-ba-ba 34, Iugal A-ga-de⁽⁴³⁾ galu A-ga-de⁽⁴³⁾ 35, mu-un-dū-a 36, Iugal-ām mu 56, ni-ag³¹⁻² アガデにて、シャルキン、イルバニ、園丁、33 ウルイルバの酌取り、³⁴⁻⁵ アガデ國王、アガデ建設者、36 國王となり、五十六年治世³⁾。

とあり、アガデの都市造營者にして國王たるウルイルバの侍臣シャルキン・イルバニ(通常シャルキン、或はサルゴンと稱せらる。)の前身は園丁であつたがウルイルバの臣下となり、後王位を篡奪

してアガデ國王となりその治世五十六年に及んだ。サルゴン傳説によれば、サルゴンの母はユーフラテス河岸の都市アズピラアヌ Azupirānu の身分賤しき住民であつて、彼は父を知らず、叔父は樵夫であつたらしい。母は彼を産むや直に蘆籠を作り、彼をのせ、ユーフラテスの流に捨兒した。農夫アキ Aki が下流にて彼を拾ひ、自分の子として養育し、長ずるに及んで彼の園丁 nu-gi-ka-ri となした。アガデの主神イシュタルが園丁サルゴンを愛し、女神の援助によつて、アガデの王位に即くことが出来たとある。とにかくサルゴンは賤夫の間より身を起し、アガデの君位に即いた傑物であつた。

扱北方アガデの國王となつたサルゴンは南方の雄ウルク國王ルガルツアツギシと前後二回に互つて衝突してゐる。⁵⁾第二回の會戰に於て彼はルガルツアツギシに味方する五十名のイサグ isag の聯合軍と決戦し、これを撃破し、二十五年間南方シユメール地方に君臨したルガルツアツギシを捕虜となし、つゞいて南下「ウルの人」*in ni-ma-ma-da* と一戰これを攻略し、更に東に轉じてラガシュを討ち、ペルシャ灣にてその劍を洗ひ、*sis-tukul-ni-a-ab-da-ka-ni-tal-z*、最後に二百年の歲月を要して國力恢復したウムマを降して完全にシユメール地方をアツカード(アガデ)の支配下に置いた。

次に彼は東方エラム地方に遠征の軍を率ひ、Barahsi, Ganni, Bunban, Guni-laha, Saba, Awvan, Anshan 等の都市を征服した。彼は又治世の三年に西方遠征を企て、まづ中部ユーフラテスのマリ Mari を降し、西進ユーフラテスの西岸ヤルムチ Iarmuti を征し、更に進んでタウルス山腹のイブラ

Ibla を陥し、かくて「杉の森」*kisū erinni* (ニレバノン山)「銀の山」*šade kaspim* (ニタウルス山)を領土となし、カバドキア地方のセム人植民都市ガネス *Ganes* の植民の要靖により、ブルサハンダ *Bursa-handa* の國王ヌール・ダガン *Nūr-dagan* を屈服せし、更に南下しアムル *Amuru* 地方(アモリ人の地)シリア・バレスタイン地方)を征服して西方全土をその屬領とした。

かくてサルゴンの帝國は四方世界 *kibrat arḫaim* 即ち日出地(東方エラム地方) *mat sit Samši* より日没の地(シリア・バレスタイン) *mat erēb Samši*、上海(地中海) *tiādām alidām* より下海(バルシヤ灣) *tiādām sabīdām* まで、即ち北西バルシヤ、チグリシ、ユーフラテス流域、小亞細亞、東部地中海沿岸地方がその版圖となつた。サルゴンはこの大版圖を統治するにあつて、「十時間行程範圍」⁵⁾ *kas-bu tan* を一個の行政區となし、その長官に「彼の宮殿の子等」*māre ekali-šu* を配置し一個の官僚政治によつて世界の民に嚴然君臨した。 *ummat māṭāti niṭṭars ibel*。「五千四百人の廷臣が毎日彼と一所に食事した」*5400 zikari umiššum maḡarsu akālam ikkalu* と彼はその宮廷生活の壯麗な様を誇つてゐる。⁶⁾ サルゴンは「彼の像(複數)を西方に建てた」*salmāni-šu ina erēb Samši usziz* とその年代録に記してゐるが、彼の像はニッブル等の兩河地方からも發見されてゐるから像建立は西部地方にのみなされたものではなかつた。彼がニッブルのエンリルの神殿に建立した像の碑文には次の如き文が記されてゐる。⁷⁾

ma-na-na 誰にても

salmam 像を

su-a この

ta-ba-ru 動かすものは(?)

^aEn-ili エンリルが

šum-su 彼の名を

hi-a-bir 無にすべし。(?)

kak-su 彼の武器を

hi-is-dir こはすべし。

ma₂-ri-is 前に

^aEn-ili エンリルの

usaziz それを安置せり。

これは後に述べるウル第三王朝のグデア Gudea の像の碑文と類似してゐる。サルゴンは此像をエ
ンリル神殿に安置して臣民に禮拜させたであらうことはグデアの場合を思ひ合せて疑ふべくもない。
しかもサルゴンの孫マニシュツス Manishtusu の碑文には Šarrukin-ili 「シヤルキン(サルゴン)は我

が神なり」と記され、前述アシュモレアン・ミュゼアム所藏のシュメール・アツカード王朝年代録には Sharrukin-ibbani「シャルキンは輝ける神なり。」と録されてゐることより推察してもサルゴンが生存中既に神化崇拜されたことが知らるゝであらう。サルゴンの曾孫ナラム・シイン Naram-Sin は生存中「アツカードの神」iu akkadim^{1st}として臣民より崇拜されてゐる。彼の時代の書記 dupšarru の印章に次の如き句が彫銘されてゐる。⁹⁾ 1. iu^{1st} Na-ra-am^{1st} Sin 2, iu akkadim^{1st} 3, Sa-ri-is-da-gal 4, dupšarru 5, warad-ka

1、ナラム・シイン、2、アツカードの神、3、シヤリシユダガル、4、書記、5、汝の僕

サルゴン前期即ち都市國家對立時代に市國家君主が單にパテシ Patesi、イサグ Isag、或はルガル Lugal と稱し神の代理として満足してゐたものがサルゴンによるアツカード帝國創立と共に自己を神として人民に崇拜せしめたことは單に大帝國君主の虚榮と考へ去つてよからうか。筆者はこれをもつて、言語風俗人種を異にする異人種異民族を抱括したアツカード君主が帝國統治上案出した統制手段と考へたい。被征服民族とはいへ宗教的感情の濃厚な古代諸人民に、彼等の長き複雑な傳統を有する主神に代ふるに、征服國家アツカードの主神イシュタルをもつて臨むことは被征服民の宗教的反感を招き、完全なる帝國統一政治が禍ひされるは見易き理であらう。よつてアツカード世界帝國が創立され官僚政治が完備せらるゝやサルゴンは帝國統制の一手段として當時の人民の濃厚強烈な宗教意識

を利用して國民神民族神を超越した權威あり偉大なる君主即ち自を神化し、帝國神として、もつて異民族よりなる帝國臣民にその崇拜を命令したであらう。

こゝで一吋シュメール・アッカド時代の宗教思想に就いて一言するの要があらう。等しきものが等しきものを知るにはシュメール人のメタフィジクの出發點であつた。人間の不幸、災禍、苦惱悲愁欲求野心等を理解するためには神は人間と同性質をもつてゐねばならぬとシュメール人は考へた。尙進んで人間を理解し、これに同情するためには神は人とならねばならなかつた。天地創造物語によれば神は人^{god}であつた。¹⁰⁾ エシリルは「神々の王」「世界の主」「國々の王」と稱せられた。シュメールの神は人間の如く話し、飲食し、喜怒哀樂し、妻妾を有ち子女を産んだ。神々の王なるエンリルの妃神はニンリル皇太子はニニブであり、エ・クル^{E-kur} 神殿で文武百官に奉仕されてゐる。シュメール人は人間同様の屬性、機能制度を神々に與へてゐる。神は神自身の社會を形成してゐる。而してこの神の社會は人間社會の反影である。人間社會が實體であつて神の社會はその影像にすぎなかつた。兩河地方に於ける最古の天地創造物語の一にしてエリズ^{E-riš} 起源を考へられるところ天地創造物語によれば¹¹⁾ 深淵 abzu (amtu) のうちより先づ天上世界即ち神々の世界がつくられ、次に地上の現實世界が創られてゐる。天上世界には「聖所の王」^{dingir lugal-dul-kug-sa} の神殿エサギラ^{E-sagila} の聳ゆるエリズありバビロンあり、諸天神 Anunnaki の住居がつくられ、チグリス・ユーフラテス兩河が流れ、田畑

牧場沼澤あり、そこには葦、ぬゝ、の木、牧草その他一切の草木が繁茂し、牛、羊、山羊等の家畜がアルルAurumによつてつくられた人間と共に生活してゐる。此天上世界は全く地上世界の姿である。神の社會が人間社會の反影であることを示す一例である。しかしAlfred Jeremiasの如く、¹²⁾バビロニア人の實在觀をギリシヤ人のそれと同一視し、彼等は現實世界をもつて天上世界の影と考へたとなすものもあるが筆者はむしろその逆と考へる。シュメール人は彼自身に似せて神を創造したのであつた。エンリルは「世界の主、國々の王」と稱せられてゐる。神は王であるとの觀念は既にシュール・アッカード人の間に存在してゐる。地上の國王が神となることは容易である。

大征服者サルゴンが彼自身の神化崇拜を帝國臣民に命じた時兩河地方に於ては何等の障害をうけずに臣民の間に受け入れられたであらうし、又小亞細亞、東部地中海沿岸地方に於ても權力を伴ふこの制度はうけ入れられざるを得なかつたであらう。

サルゴンによつて制定された君主崇拜の制度はアッカード帝國崩壞後(西紀前約二七〇〇年)も流行し、數世紀後シュメール人によるウル第三王朝(二四七〇—二三八〇B.C.)の統一帝國君主によつて盛んに行はれた。サルゴンのアッカード帝國はナラムシインの次王シャルガリシヤリ Sharqalishariをもつて滅亡し、蠻族グチ Gutum のシュメール・アッカード地方への侵入となり、ラガシュにはウル・バウ Ur-Bau がバテシとなつて獨立國家を創り、ウルクではウツケガル Uruk-Khegal が第五王朝

(二五二〇—二四七〇 B・C・) を創立してゐる。又ラガシユには有名な建築王グデア Guttea (二四五〇 B・C・) が君臨してゐる。グデアは建築土木事業に非凡の材能を有し、又小亞、東部地中海沿岸地方に通商的遠征を試みてをる。グデアの政治的勢力はラガシユ以外のシユメール地方にも及んではゐるが彼の政治的事業はその文化事業に比して大いに遜色あり。グデアも君主崇拜制度を採用しその像を彫作してニンギルスの神殿等に安置してその臣民をして、禮拜せしめてゐる。ニンギルスの神殿エニヌ Eninnu に安置したグデアの像に彫銘された碑文に次の如き文がある。

「一家の嗣子なき時は娘が後嗣として彼の (グデア) 像の前に來り、その前に拜座すべし。彼の像は銀、瑠璃、銅、鉛、青銅にあらず閃綠岩にて作られ、清き流れの邊りに安置されたり、けがすべからず。汝等の前なる像はニンギルス及びラガシユのバテシにて、ニンギルスの神殿エニヌの造營者グデアの像なり。何人にも、エニヌ神殿よりは等の像を動かし、碑文を破損するものは、何人にも新年初頭、その神を吾王ニンギルスに代へて吾神(グデアの)なりと人民に宣言し、吾が令を守らざるものは……(ニンギルス等十七神名を擧げ)の神々が彼の運命を呪ふべし。雄牛の如く彼の目を切り斷つべし。野牛の如く、彼の武勇を虚無となすべし。」

これは Gudea, Statue B. 中の碑文の或部分の譯であるが、彼の像にしてこの他ニンギシユヂダ神 (Statue G) ハウ神 (St. F) ガツムドグ神 (St. F) 等の神殿に安置されたものがテロー (ラガシユ) より

將來されて今日巴里ルーブル博物館に保存されてゐる。而して是等の像に彫銘された碑文は長短の差こそあれ、形式内容は大同小異である。前記のサルゴンの像にせよ、グデアの像にせよ所々の神殿にその祭神の像と併置されて共に禮拜されてゐたものであることはいふまでもない。

ウル第三王朝(二四七〇—二二八〇B.C.)はウル・ナンム Ur-Nammu によつて創立されるが、彼及其の後繼者によつて擴大された帝領は兩河地方はもとより東方エラム、西北方は小亞細亞の東部、シリヤ、パレスタインを含む東部地中海沿岸地方に及び大體アツカー帝國の版圖と伯仲した。而してその帝國內の住民はシュメール人、セム人、エラム人、ヒッタイト人等であつた。高祖ウル・ナンムは生存中神化崇拜されたが、それが帝國全體に於てなされたかどうかには疑問がある。¹³⁾

しかし第二代ヅンギ Dungi(2456—2398 B.C.)以下の君主になるといづれも治世中神號をとり、一例へば *dingir-Bur-dingir-Sin*, *dingir-Gimni-dingir-Sin*, *dingir-Ine-dingir-Sin* —— 領内各地の神殿にその像を安置し、

帝國臣民をして禮拜せしめてゐる。殊にヅンギはその治世五十八年に及び其間内治外征に成功し、内にあつては法典を制定し、運河道路の開拓等土木工事を起し、官僚政治を充實して上述大版圖に一大君主として君臨した。兩河地方に於ける金融財政通商等の經濟活動の最も充實發展したのはウル第三王朝治下であつた。¹⁴⁾ *nubanda* と稱する財務官、*maskim* と稱する稅務官¹⁵⁾によつて帝國の財政が統制せられ、*dankar*, *ibera* と稱する貿易兼金融業者によつて帝國の金融及商業が活潑に行はれた。又 *ugula*

(or pa) と稱する勞働監督官が設置せられて土木事業その他生産に従事する一切勞働者 *pa* の監督を行つてゐる。¹⁷⁾ ウル第三王朝治下の財政經濟状態を知る資料は多數ニップール及び其近郊の Dprehon より發掘されてゐる。

ヅンギは領内各地に神殿を造營し彼の像を安置し、新月望月の兩日に臣民をして供物を供へしめ、又彼を祭る月即ち *itu ezen dingir Dungi* 「ヅンギ祭の月」(第八月)を曆法のうちに制定してゐる。¹⁷⁾ 又彼の臣下のうちには *Dungir-bāni* 「ヅンギは創造者なり」とか *Dungir-i* 「ヅンギは我が神なり」とか *Dungir-abi* 「ヅンギはわが父」の名を附するものとさへ出てきた。¹⁸⁾ 牛津大學アシモレアン・ミュゼウム所藏の W-B. 171 の符號のついたブリズム泥章はヅンギに對する神殿に於ける禮拜用讚頌である。今その一部分を譯出すれば、

Col. 1,

1. [ba-tu-nd-dé-en]-na-ta 半神に生れし英雄、汝、
2. dingir Dumo-gi me-en ba-tu-nd-dé-en-na-ta 聖なる哉ヅンギ、半神に生れし勇者、汝
guruš kal-ga me-en
3. ug igi-luš uš-ugal-e tu-da me-en 眼光輝く狗、大龍と生れし汝、
4. lugal an-ub-da tab-tab-ba me-en 四方世界の王、汝、

- 5, na-kid sid sag-gig-ga me-en
- 6, nir-gál an-kur-kur-ra me-en
- 7, dumu ù-tu-da ⁴Nin-sun-kam me-en
- 8, šag-gi pad-da an-krug-ga me-en
- 9, lu nam-tar-ra ⁴En-il-la me-en
- 10, dingir Dun-gi ki-ag ⁴Nin-il-la me-en
- 11, sal-zi-dûg-ga ⁴Nin-tu-ra me-en
- 12, giš-tug sun-ma ⁴En-ki-kam me-en
- 13, lugal kal-ga ⁴Nannar me-en
- 14, ug ka-du-a ⁴Utu-ù me-en
- 15, dingir Dun-gi hi-iti pad-pa ⁴Innini me-en
- 16, anšun-na kaš-e dú-ú me-en
- 17, anšun-kur har-ra-an-na kun-sud-sud me-en
- 18, dir edin-na kaš-e kin-ga me-en
- 19, dub-sar gal-zu ⁴Nidaba me-en

黒頭(人類)の牧者、飼羊者、汝、

天上天下の偉人、汝、

ニンスンに生れし汝、

アヌの聖心もて選ばれたる汝、

エンリルの運命兒、汝、

聖なる哉ツング、ニンスルの寵兒、汝、

ニンスルの愛撫をうけし汝、

エアの智慧をうけし汝、

ナンナルに力づけられし汝、

怒號の狗、太陽の熱、汝、

聖なるヅンギよ、選ばれたるイシエタルの飾、汝、

路駢る騾馬よ汝、

旅路行く馬よ汝、

平原を飛狂ふ野駒よ汝、

ニダバの聖なる學者よ汝、

20, nam-ur-sag-mu-gim nam-kal-ga-mu-gim

吾武、吾勇の如、

21, giš-tug-ga šu-lu-nu-ni-du-a

智をも我に飾したまへ、

22, enún-gi-na-bi ha-ma-da-sa-a

彼の誠言もて我正しく導かれん、

23, nig-si-di ki-ja-ba-ag-ga-ám

正義我愛すべし。

24, nig-erim-e ki-la-ba-ra-ag-ám

悪逆汝愛せざるべし。

25, enin nig-erim dug-ga hul ha-ba-ra-gig-ga

暴言汝惡むべし。

26, dingir Dun-gi me-en lugal kal-ga sag-bi-su

聖なる哉ヅンギ、汝、全てに勝る偉大なる王、汝

e me-en

.....

かくの如き禮拜用讚頌は神殿に於て聖歌僧 *gala* が *esemma* 僧のふく蘆笛 *esemma* や太鼓 *balag* に調せて神像の前にて謳はれるものである。¹⁹⁾

ヅンギの後繼者 *Bur-Sin*, *Gimil-Sin*, *Ine-Sin* はいつれもヅンギの如く神號をとり神殿を造營し自己の像を安置し臣民をして禮拜せしめてゐる。しかるにウル第三王朝もイネ・シインの頃エラム先づ叛きつゝいてラルサ *Larsa* 獨立を宣してより國內諸所に叛亂續發し、さしもの大帝國も崩壞の非運に遭遇した。叛亂者の一人にアモリ族の *Sumur-abum* なるものは、*ヒビロン* に據つて國王と稱した。(2250)

B. C.)。スムアブムの六代の孫に一人の名君現はれ兩河地方を三度統一してバビロン帝國を確立した
これ有名なハンムラビ Hammurabi (2123—2080 B. C.) である。ハンムラビの帝國も大體アツカード
ウル兩帝國の版圖と伯仲し、その領内の住民はセム人、シュメール人、エラム人、ヒツタイト人ミタ
ンニ人等であつた。

舊約聖書創世記第十四章に出てくるシナル Shinar の王アマラフェル Amraphel が、ハンムラビな
りや否やに就いては議論の存するところであるが、ハンムラビがアマラフェルなるためには言語學上
ではハンムラビの名が Hammurabi-iliu 「ハンムラビは神なり」となれば Amraphel への轉訛の説明
がつく。ハンムラビ自身が Hammurabi-iliu なる稱號をつけた文獻はないが當時の人名にはあつた。²⁰⁾ 彼
はその制定した法典中に「諸王の神」iu sari; Col III, 15. 「バビロンの太陽神」iu xamas Babilim;
Col. V. 4—5, と自稱してゐる。これによつて彼が自を神化したことは判る。シリア、パルスタイン地
方に於ける神としてのハンムラビ崇神の跡が約千年後イスラエル人の傳説のうちに傳へられたのがア
ムラフェルであらう。

ハンムラビは彼の像を作らしてゐる。彼の年代記治世十五年の條には「七個の彼の像の(作られた)
年」nu alan-bi imin am とあり、二十二年の條には「正義の王ハンムラビの像の(作られた)年」nu
alan Ha-am-mu-ra-bi Iugal nig-si-di とある。²¹⁾ 彼が是等の像を神殿に安置して人民をして禮拜せしめ

たことはいふまでもなからう。

以上神としての君主崇拜の跡を西方亞細亞に三度帝國統治を行つた大君主、サルゴン、ヅンギ、ハムラビの三大君主によつて辿つてきた。エヂプトに於てはその王朝の國王は始めよりその王室の氏族神ファルコン・ホルス Falcon Horus の地上に於ける生ける像即ち地上の神王であつたがエヂプト王國の擴大とともに、ファラオ崇拜はその臣民たるヌビア人、リビア人、アジア諸人民の間に強請されることゝなつた。²²⁾

君主崇拜制定の動機は A. Moret, G. Davy 兩氏も主張してゐる如く、兩河地方の國王が根本的に無關係であり、數千年間交渉なかりし諸人民の支配者となつた時民族神を超越した君主崇拜をその臣民の間に興して、政治的統一の基礎として宗教的統一を達成せんと欲したところにあらう。²⁴⁾ アツカードのサルゴンもウル帝國のヅンギもバビロン第一王朝のハンムラビもエヂプト第十九王朝のラムセスもベルシヤ帝國のキルスもマケドニアのアレクサンドロスも將又ローマのアウグスツスも彼等が諸民族の上に君臨する一大君主となつた時上述の動機よりして自ら「帝國の神」となつてその臣民にこれが崇拜を強請したであらう。かくて大君主とその周圍の權力階級者とその時代の現實に即して制定した君主崇拜制度は帝國主義的イデオロギイとして彼等自身及その後繼者にとつて彼等の世界統治にまこととに好都合な宗教的政治統制の武器となつたであらう。——終り——(一九三二・一二・三二)

- (16) Lau, Old Babylonian Temple Records, New York 1906, pp. 29, 30 參照
- (17) 羅納, The Sumerian Tablets in the Imperial University of Kyoto, Tokyo 1928, (Memoirs of the Research Department of the Toyo-Bunko, No. 3.) 中の學長報告 Nos. 17, 21, 29, 37, 參照
- (18) Delaporte, op. cit. pp. 35—6.
- (19) S. Langdon, Sumerian and Babylonian Psalms, Paris 1909 參照
- (20) Meissner, op. cit. S. 47.
- (21) King, op. cit. pp. 100, 101.
- (22) A. Moret and G. Davy, From Tribe to Empire, London 1926, p. 212.
- (23) *ibid.*, pp. 211—2.